

教えて！ 浄土 真宗

「浄土真宗」という宗名(2)



行信教校講師
藤澤 信照
ふじさわ しんしょう

『大無量寿経』に説かれた教え

前回は「浄土真宗」という宗名にこめられた意義についてお話ししました。そこで今回は、親鸞聖人が「浄土真宗」と名づけられた教えがどのような教えなのか、親鸞聖人のお言葉によって、その概要をお話ししたいと思います。

親鸞聖人は『教行信証』を著して、「浄土真宗」という教えを明らかにしていける

のですが、各巻のはじめに標挙といわれる言葉で、その巻であらわそうとすることを端的に述べておられます。「教文類」の標挙には、

大無量寿経 真実の教 浄土真宗

(註釈版聖典134ページ)

とありますから、親鸞聖人は『大無量寿経』(仏説無量寿経)を「真実の教」とし、この経に説かれた教えを「浄土真宗」と名づけておられることがわかります。

それでは、親鸞聖人はなぜ『大無量寿経』

の教えを「真実の教」といわれたのでしょうか。その意を「教文類」の本文には、

それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿経』これなり。この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲すなり。ここをもつて如来の本願を説きて経の宗致とす、すなはち仏の名号をもつて経の体とするなり。(同135ページ)

(※道教＝釈尊一代の教説、光闡＝広く説きよめること、真実の利＝阿弥陀仏の本願名号)

といわれています。お釈迦さまは常々「すべての人々にさとりの道は開かれている」と説いておられました。ですから、お釈迦さまご一代の説法の中で、善悪・賢愚

のへだてなく一切衆生を救う「阿弥陀仏の本願名号のいわれ」を説く『大無量寿経』こそ、お釈迦さまがこの世におでましくくださった本意の経であるといえます。それゆえ親鸞聖人は、この経を「真実の教」とされ、説かれた教えの内容から、この経の教えを「浄土真宗」と名づけられたのです。

「第十八願」の教え

親鸞聖人は『大無量寿経』に説かれた教えを「浄土真宗」と名づけられました。その要は阿弥陀仏の本願(四十八願)を説くことにありました。本願とは仏になる前、つまり菩薩であったときの誓願のことです。親鸞聖人の師である法然聖人は、『選択本願念仏集』本願章に、阿弥陀仏はその昔、法蔵菩薩であった時、平等の慈悲に催され、

浄土真宗

あらゆる人々を救うために、その本願に、一切の行を選び捨て、ただ念仏一つを選び取って往生の行とされた、といわれています。すなわち法然聖人は、第十八願こそが四十八願の根本の願であるという意味でこれを本願とし、念仏一行を選び取られていることから「念仏往生の願」と名づけ、また「選択本願」と名づけられたのです。

親鸞聖人はこの意を承けて、
 選択本願は浄土真宗なり。

(註釈版聖典737ページ)
 『親鸞聖人御消息』第一通に示されたのです。先に、親鸞聖人は『大無量寿経』の教えのことを「浄土真宗」と名づけられたといいましたが、その教えの要は第十八願であり、そこにこの経の教えのすべてが集約されていますから、選択本願(第十八願)に誓われたこともまた「浄土真宗」といわ

れたのです。

「念仏成仏」という教え

それでは、第十八願にはどのようなことが誓われているのでしょうか。法然聖人は、第十八願には「ただ念仏一行をもって往生の行とする」と誓われているとご覧になって、この願を「念仏往生の願」と名づけれました。親鸞聖人もこの意を承けて、

『浄土和讃』「大経讃」に、
 念仏成仏これ真宗
 万行諸善これ仮門
 権実真仮をわかずして
 自然の浄土をえぞしらぬ

(同569ページ)
 といわれています。すなわち、「浄土真宗」とは簡略に言えば「念仏成仏」、すなわち

「念仏を申さば仏になる」という往生成仏の因果を説く教えであるといわれたのです。

なお、法然聖人は「往生大要抄」に、
 心に往生せんとおもひて、口に南無阿彌陀仏となえば、こゑについて決定
 往生のおもひをなすべし。

(浄土真宗聖典全書上 432ページ)
 といわれていますから、法然聖人が明らかにされた念仏とは「心に必ず往生できると信じて、口に南無阿彌陀仏と称えること」であることがわかります。

親鸞聖人はこの意を承けて、「浄土真宗」とは「本願を信じ、念仏を申さば、仏になる」という教えであると受け取られたのです。親鸞聖人の弟子・唯円房が著したといわれる『歎異抄』の第十二条に、

他力真実のむねをあかせるもろもろの
 正教は、本願を信じ念仏を申さば仏に

さらに親鸞聖人は、法然聖人が「念仏は行者がことさらに回向する必要のない不回向の行である」といわれていたことや、「信心は如来よりたまわりたるものである」と

「二回向四法」の体系をもつ教え

成る。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。(註釈版聖典839ページ)
 といわれていますから、唯円房は親鸞聖人から「浄土真宗」の要をしっかりと聞き受けていたことがわかります。
 なお、「そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや」といわれているように、浄土真宗の教えを学ぶといっても、「本願を信じ、念仏を申さば仏になる」という教えを、はからいなく聞き受けるほかはない、ということをおかねばなりません。

浄土真宗

いわれたことを根拠に、天親菩薩や曇鸞大師の教えを通して、この教えが「本願力回向」という救済体系をもつ教えであることを明らかにしていきました。

前回も挙げましたが、親鸞聖人は『教行信証』「教文類」のはじめに、

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。(註釈版聖典135頁)

といわれ、また『浄土文類聚鈔』には、本願力の回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。

(同478頁)

といわれています。これらの二つの言葉によつて、「浄土真宗」とは、往相(往生浄土の相)自力の教・行・信・証という四法と還相(還来穢国の相)利他との二つの回向

法からなる、二回向四法という救済体系を持つ「本願力回向」の教えであることを明らかにされたのです。

本願力回向ということ

ところで、「浄土真宗」という教えが「本願力回向」という救済体系をもつ教えであるとは、どういうことなのでしょう。最後に、そのことを簡略にお話しいたします。まず、「本願」とはもともと「因本の願」、すなわち「阿弥陀仏が因位の法蔵菩薩であったときに発された願い」ということで、四十八願すべてを指していました。四十八願の要は第十八願であり、これを「根本の願」とするという意味で、第十八願もまた「本願」とよぶのです。いま「本願力回向」というときの「本願」とは、四十八願すべ

てを一つにおさめた第十八願のことを指しています。すなわち、法蔵菩薩が「あらゆる人々に、わが救いを信じさせ、わが名を称えさせて、浄土に生まれさせよう」と誓い願われたことを「本願」というのです。

この願いが完成して阿弥陀仏となられて以来、阿弥陀仏は因位の誓願のままに、「南無阿弥陀仏」というよび声となつて、あらゆる人々に自らの救いを信じさせ、念仏申す身に育てあげて、浄土に生まれさせるといふ救済活動を行つておられます。その救済活動を「本願力」というのです。そして、「南無阿弥陀仏」という名号は、往生成仏の因となり果となるように、衆生に回施(回向)されていますから、これを「本願力回向」といわれたのです。

すなわち、「浄土真宗」という教えは、助けてくださいとお願いする心や、自らの

善根功德を阿弥陀仏にふり向けることなど少しも必要なく、ただ阿弥陀仏のお救いをほればれと仰ぎ、必ず往生できると信じて念仏申すものは、今この土で仏さまの光につつまれ、やがて必ず浄土に往生して、さとの仏となり、自在に人々を救うことのできる身となる、という教えだったので。

ちなみに、親鸞聖人には一宗を打ち立てようという意識はなく、ひたすら法然聖人の「念仏往生」という教えの真実義を明らかにすることにその生涯をかけられたのですが、結果として「本願力回向」という独自の思想を確立されるなど、一宗の開祖としての条件を備えられましたので、親鸞聖人を浄土真宗の開祖と仰ぐのです。その意味で、浄土真宗という教えは法然聖人と親鸞聖人というお二人の宗教的天才による合作と言っても過言ではありません。